

<特集補遺:まえがき>

特集補遺:まえがき  
Special Issue: Foreword

風間 伸次郎  
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
Tokyo University of Foreign Studies

DOI: <https://doi.org/10.15026/0002000371>

## 1. これまでの経緯と今回(28号)での方針について

2009年に『語学研究所論集』(以下『語研論集』)の14号で「特集」が開始され、4年前に刊行した23号まで、10のテーマに関する特集が行われてきた。その内容を振り返ると、14号:受動表現,15号:アスペクト,16号:モダリティ,17号:ヴォイスとその周辺,18号:所有・存在表現,19号:他動性,20号:連用修飾的複文,21号:情報構造と名詞述語文,22号:情報標示の諸要素,23号:否定,形容詞と連体修飾複文,となっている(ただし,まだとりあげていない文法カテゴリー/文法現象も数多くある)。11年目~15年目(24号~本28号)では引き続き,これまでの特集でデータの得られていなかった言語の補遺を進めていくことを目指した。補遺の収集もすでに5年目ということになる。

## 2. 今回収集されたデータの意義

### 2.1. 対照研究や類型的研究,言語接触の研究にとって大きな意義を持つデータ

言語に優劣はなく,どの言語も唯一無二のものであって,どの言語のデータも他の何物にも代えがたいものであることは言うまでもない。ただ言語類型論的研究の観点からすると,やはり極めて大きな意義を持つデータというものはある。それは何より系統的に孤立した言語のデータである。ニジェール・コンゴ語族やオーストロネシア語族の言語は1,000を超える。もちろん,その内部には大きな差異があるのだが,一方で語族内における類似も確かにある程度存在することだろう。これに対して系統的に孤立した言語のデータは,極端に言えばそうした一語族に匹敵する価値があるということになる。

こうした状況において,今回ブルシャスキー語の全データとバスク語のデータの半分が提供されたことの意義は大きい。ブルシャスキー語のデータは,この言語の全般に関して博士論文を書いたこの執筆者でなければ到底提供することのできなかつたはずのものである。その形態論も複雑で,たとえデータがあつたとしても十全に形態素分析を行うことはこの執筆者以外では不可能だろう。この言語の記述はこれまでドイツ語や英語でしか出版されておらず,日本語を通じてこの言語に触れることができるようになったこともたいへんありがたい。おそらくこの地域の地域特徴の一つと思われる能格絶対格構造と,テンス・アスペクトによるそのスプリットの研究に関して,この言語のデータは欠かせないものと思われる。この言語のデータをお寄せ下さったことに深く感謝申し上げる次第である。バスク語のデータは,本学でスペイン語を教えてください非常勤講師の方が,実はバスク語を母語とされていて,この方から学部の4年生が調査して得た一次データであり,これをバスク語の専門家に分析とグロスをお願いして作成されたものである。本学のスペイン語

本稿の著作権は著者が保持し,クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。  
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



科 (およびフランス語科) の学生にもバスク語に興味を持つ者は多くあり、その点でもこのデータは重要である。今後さらにバスク語に関心を持つ方が増えることを祈るとともに、来年度の号で残りのデータが全部揃うことを切に願う (データの例文自体はすでに収集できている)。

この点では、やはり系統的に孤立した言語で、もはやほとんど話者がいないという状況になってしまったアイヌ語沙流方言について、前号に続き文献からのデータ収集というやり方でデータを提供していただいたこともやはりたいへんに貴重である。1 特集ではあるが、今後も 1 特集ずつでもよいので提供を続けていただければと切に願う。

次に興味深いのはムンダ語とシンハラ語のデータであろう。オーストロアジア語族の言語といえば、ベトナム語とクメール語があり、外語大にはその両言語が専攻言語としてあるものの、ほとんどがその個々の言語の個別研究であって、オーストロアジア語族全体の類型や、内部の系統関係や歴史などの研究は非常に少ない状況である。こうした中、地理的にも系統的にも最も遠いムンダ語のデータが得られることにより、上記のような研究の発展することを望む。ムンダ語はまた、名詞と動詞の区別がない、とも言われる言語である。今回のデータでも外来語を含め、他の言語ではもっぱら名詞としてしか扱われないような概念が、動詞の接辞を取って動詞として扱われている例を見ることができる。そのように理論面でも貴重なデータを提供していただき深く感謝している。シンハラ語の全データが得られたことも大変に意義深い。この言語は印欧語族に属するとされているものの、ヨーロッパの多くの印欧語との違いはきわめて大きく、今なお印欧語族への帰属を疑問視する向きもあるぐらいである。「いる」と「ある」にあたる区別も存在することから、注目を集めている言語でもある。インド言語領域などの観点からもこの言語のデータが果たす役割は大きいだろう。大学生たちから日本語を訳してもらうことによって得たデータをさらに内省の利く話者に英語も参考に確認してもらう、という丁寧なやり方でデータを集めていただき、たいへんに感謝している次第である。印欧語族のインド語派の言語ということで言えば、今回マラーティー語の 5 特集分のデータの得られたことも貴重である。インド語派では、ベンガル語、ヒンディー語、ウルドゥー語、マラーティー語、シンハラ語のデータがあるということになった。インド言語領域の諸特徴を念頭に起きつつ、これらの言語のデータを比較対照してみることも意義のある試みではないだろうか。さらに今後シンディー語やパシュトゥー語などのデータが加わることがさらに望まれる。

さらに違った観点、すなわち「言語接触」の観点からみて、きわめて興味深いデータもある。サマルカンドタジク語は、印欧語族のイラン語派の言語であるが、チュルク諸語のひとつであるウズベク語からのきわめて大きな影響を受けて成立した言語である。これまでにペルシア語のデータもウズベク語のデータも全部得られているので、これらと比べつつ、言語接触の実現の状況を研究することもできる。ペルシア語の研究者にとっても、ウズベク語の研究者にとっても、両言語の素材や構造がこのサマルカンドタジク語の諸表現にどのように実現しているかを知ることは大変示唆的であろう。しかもその執筆者は日本語科で日本語を学んだこの言語のネイティブスピーカーであるので、その分析の精度や価値も高い。この言語のデータを提供して下さったことに深く感謝する次第である。この点に関して言えば、アフリカに根付いたゲルマン語派の言語ともいうべきアフリカンス語のデータも、やはり言語接触の観点からみて興味深いものと言えるだろう。ゲルマン語派の言語と言え、今回ノルド諸語のひとつであるノルウェー語の全データが提供された。外語大には北欧の言語に関心を持つ学生が例年たくさんいるが、北欧の専攻言語はない。英語やドイツ語のデータを生かしてゲルマン語派の全容を学んで行こうとするには、どうしてもノルド諸語のデータが必要である。さいわいノルウェー語、スウェーデン語、デンマーク語の間の差異はそれほど大きくないと聞く。アイスランド語のデータがわずかしかなことが残念ではあるが、今回のノルウェー語のデータによりゲルマン語派研究に興味を持つ人が増え、その方面の研究の進展することを望む。

## 2.2. 語族内での変異や歴史，さらには語族全体の特性を解明していくために重要な意義を持つデータ

上記以外で，今号の収集言語データで多くを占めているのは，チベット・ビルマ系の言語（5言語：マルマ語，テディム・チン語，ラモ語，チョネチベット語扎古録方言，アムド・チベット語），アフリカの言語（4言語：アカン語，アムハラ語，ベンバ語，ガナ語），アルタイ諸言語（3言語：アゼルバイジャン語，カザフ語，ホルチン・モンゴル語）であろう．日本ではチベット=ビルマ言語学研究会や東京アフリカ言語学研究会が活発な研究を行なっている．アルタイ諸言語の研究もユーラシア言語研究コンソーシアム（CSEL）や北方言語学会でさかんに行われている．これらの研究会のふだんからの活動と，それを支える多くの研究者は日本の言語学において大きな位置を占めているといえるだろう．今号でもそうした精鋭の研究者にお願いし，一部はむしろ逆に積極的なデータ提供のお申し出をいただいて上記のようなデータが集まった．上記の研究会やそれにかかわる研究者の方々に深く感謝申し上げたい．他には広東語（シナ語派）とスンバワ語（オーストロネシア語族）のデータを1特集ずつ提供していただいた．

上記の諸言語はいずれもかなり大きな語族の言語である．したがって語族全体からみれば今回までに得られたデータの量はまだまだその中のほんのわずかであり，語族内での変異や歴史，さらには語族全体の特性を解明していく道りはまだまだ遠い．しかし，その一方で上記のような充実した研究者たちの力により，少しずつではあっても今後も着実に蓄積が進んで行くことを十分に期待することができる．一方，重要な地域の諸言語や，大きな語族／言語群の諸言語でありながら日本では研究の盛んでない語族／言語群や（系統的に孤立した）言語も多数存在する．さらには一定の数の研究者がいるにもかかわらず記述や研究がもう一つ進展していったいない言語もある．今後はそうした研究者に力を発揮していただいたり，日本に研究者の少ない語族や言語群の研究者を増やしたりしていく必要もあるだろう．

今号のデータ収集に際しては，学内にポスターを貼って，学内にいる多様な言語の母語話者の方々からデータを収集し，学生たちの力も借りて分析を進めデータを作成しようとした．例えばアカン語の一次データはそうして収集したものである．他にも一次データをある程度得たものの，やはり専門家でない正しいグロスをつけて的確に分析することはなかなか難しいことがわかったため未分析のまま放置されたデータもかなりある．やはりその言語の記述や分析に熱意を持った研究者の存在こそが，貴重な言語の話者に負けず劣らず，きわめて得難く，かつ重要なことであるということを痛感した次第である．

## 2.3. 日本語諸方言への展開

前号ではユニークなものとして，初めて大阪方言の全10特集分のデータが得られた．今回はこうした日本語の方言のデータ収集が継承され，山梨県奈良田方言のデータが5特集分，九州の柳川方言のデータが2特集分，作成され提供された．奈良田方言は山深く入って行かねばならない地点にあり，「方言の島」をなしている貴重な方言で，日本語諸方言全体の研究においてもきわめて重要な方言である．本データは現地調査によって得られた貴重なものである．柳川方言は70台の話者3人によるやはり貴重なものである．日本語諸方言においては近年共通語化が著しく，今記録しておかなければ日本語の歴史や変遷の解明にとって重要な諸特徴がどんどん失われてしまう状況にある．前号でも書いたが，これまでの方言研究には伝統的な国語学・日本語方言学の観点に縛られていたきらいがあり，活用やアスペクトなど一部の文法現象の記述に偏っていた面があるため，こうした特集データの収集には一定の意義があるものと思われる．今後も少しずつでもデータを集め，日本語諸方言の（統一的な調査票による）例文の総体を提示できるようになるとよいと願っている．特に今後は琉球諸方言や八丈島のデータが得られないか，その可能性を探っていきたいと考えている．

## 3. データの活用に関する報告

昨年（2023年）11月12日に同志社大学で行われた日本言語学会第167回大会において，本稿執筆者の風

間、岡本進、小林剛士、小林颯の4名にコメンテーターとして山本恭裕を迎え、「言語類型論の諸問題に対する機能的アプローチ — 『語学研究所論集』特集データを活用して—」というタイトルでワークショップを行った(敬称略, 以下も)。各人の発表テーマは次の通りである: 風間「アスペクトと動詞連続に関する類型論的考察」、岡本「自他交替とヴォイスの連続性についての類型論的考察」、小林剛士「限定と極端のとりたての類型論: 文構造の交替の類型論的記述と情報構造に基づく類型論的仮説」、小林颯「連体修飾に関する類型論的考察」。なおその内容は論文化・刊行し、『思言』19:3-53 としてHPでも公開しているので、詳細はそちらを御覧いただきたい。このように収集しつつある語研特集のデータも、言語間の対照や類型論的な分析・考察に活用しなければ意味がない。今回のWSならびにそれに基づいて刊行した諸論考はその一つの試みである。さらにこのワークショップを行ったことによって、コメンテーターのコメントや会場での質疑を通して、本特集データの長所や短所が少し明らかになってきた(これについても詳細は上記文献にゆずる)。欧米ではWALSやGrambankがすでに作成され活用されている。それらに対し、またそれらと併用して、本特集データもその長所を生かしてこれを活用するとともに、その長所短所をさらに明らかにし、場合によっては修正を加えていくことが必要であると考えている。

一方、ネット上でのアクセスが容易なデータベースの整備にも力を入れて、これを進めていきたいと考えている。

#### 4. 今後の目標

方言として数えられているものを含め、現時点で(最低1特集でも)収集された言語の総数は98である(前号に記した数値には数え間違いがあったようだ)。前号より18言語増えた。今後もし少しずつであっても地道にこれを増やしていくことを目標としたい。上記のように、こうした研究は各個別言語の研究者の協力なくしては一つも進むものではない。残念ながら欧米の研究者たちにおけるそれと比べ、日本の、特に個別言語の研究者間での共同・連携の体制/状況は十分とは言えないように感じている。他方、近年研究分野の細分化が急速かつ強力に進行しており、自分の研究している言語やそのテーマを少し外れるともはやさっぱりわからない、という状況も多く見受けられるようだ。現在熱心に取り組まれているテーマを深化させていくことももちろん重要なこととは思いますが、より広く全体を見回したり、他の言語との関連や、類型論的な関心から問題となるデータを改めて見直したりすることによって得られるものもきっとあるのではないかと考える。言語現象は全て互いに関連し合っているものであるので、御自身のテーマにとっても有効な発見があるかもしれない。勝手な理屈かもしれないが、とにかく今後も多くの個別言語の研究者の方々のご協力を賜りたい。何卒ご理解とご協力をいただければ幸いである。以上でこの「まえがき」の筆を置く。読者からの御教示、御批判御叱正等をいただければこれも幸いである。

連絡・問い合わせ先: kazamas@tufs.ac.jp, ilr419@tufs.ac.jp

#### 謝辞

今回、データを作成・提供して下さった先生方、ならびにそのコンサルタントとなって下さった話者の方々に深くお礼申し上げたい。特に本学以外の他の機関に所属されている先生方で、本特集のデータ収集の意義に御理解を示して下さい、データを作成・提供して下さった先生方に深くお礼申し上げる。上記の「まえがき」本文に、それぞれの言語と共にそのお名前をあげてお礼を申し上げたかったが、筆者が直接に依頼した先生方と、間接的に依頼した先生方との間などで、筆者の言及の仕方の度合いが違ったり、不平等・不統一になったりすることを恐れ、あえて記すことはしなかった。ここに一括してお名前を挙げずに謝辞を記すことをお許し願いたい。